【　特別資料、複製稿　】　文責・仲村重明(＝中村重夫)

■　『　村上昭夫さんについて　』　中村重夫　(ⅢD)

『石櫻新聞』第８０号(1970,2,10岩手中学・高等学校発行より)

【　新聞掲載にあたっての担当教員(無署名)による序文より　】

★　出版の編集の任に在ると、総合的な面での現状分析は不可能にしても、その一端は対象として余すところなく眼前に写し出され、視る主体側にとって過大評価せざるを得ない部分が出てくる。民主主義と科学の合理的かつ論理的な現在に存在しながら、惰性的な心情の世界にどっぷりと浸かり、なんら生活の秩序を見い出す意欲を持たなければ、言葉と心情の隔離にいくら悩みぬいたとしても、そこには何の解決もないであろう。言うまでもなく、文章を書くことは一つの意識作業である。放散し易い人間の精神に秩序を与えるにはむ論いろいろな方法があろうが、文章を書くことが意識作業である限り、その一つであることを忘れないで欲しい。この原稿は、大学受験を控え、多忙な毎日を送って居る中村重夫君に、無理を言って書いてもらったものである。重夫君に続く文章家の出現を願って止まない。〈注、原文のままにて〉

《　中村重夫の掲載本文　》

★　村上昭夫さんが亡くなられてから二・三週間も経ったころでしたか、山田君と僕が学校の文化祭で、故・村上さんを偲んでの追悼記念展示会を引き受けることになり、長い療養生活に耐えておられた青山の国立療養所を尋ねて、数枚の写真を撮らせていただいた時がありました。　村上さんが入っておられた西病棟の病室には入れてもらうことはできませんでしたけれど、庭から病室の窓や壁などは写させていただきました。療養所に着いた時は夕方だったので、岩手山は遠くかすんで見えませんでしたが、日の沈むあたりの山々は薄黒くなって、それがその上にある個性の強いそれぞれの雲と対比し、山波だけはくっきり光って、なにか神秘的な美しさを感じさせられました。院内もちょうど文化祭らしく、きれいな菊のはち植えが廊下の両端にいっぱい並べられてありました。人の話で、西寮棟の患者はいつも「生」と「死」が同居しているのだ、というようなことを聞いたことがありますが、そんなふん意気は少しも感じられませんでした。しかし、せつなせつな村上さんを襲う「死へ」という暗く悲しいできごとへの不安は、やっぱりあったのだろうと思います。もちろん僕たちのように、一応平和で安定した生活をしている者にはとうてい理解しきれないものでしょうが、人の話など聞いてだいたいの想像はすることができます。　そんな生活の中で、村上さんにとってほんとうにたよれるものは、いったいなんだったのでしょうか。村上さんは次のように言っています。『私の場合ですと、やはり今までどうり、「死」という暗く悲しく、つらい色をした、もっとも強度な眼鏡をかけなおして、ふたたび耐えがたい旅に出るよりほかならない(晩翠賞受賞の記より)』と。　村上さんが詩を書こうとした動機は、宮沢賢治の童話を読んだのが最初なそうですが、その背景としてやはり「さみしさをまぎらわしたいという気持ちがあったのだろう」ということを、村上さんのお父さんが話しておられました。参考に、宮沢賢治の詩をふたつ引用します。

たよりになるのは　くらかけつづきの雪ばかり　野はらもはやしも　ぽしゃぽしゃしたり黒んだりしてすこしもあてにならないので　まことにあんな酵母のふうのうつろなふぶきではありますが　ほのかなのぞみを送るのは　くらかけ山の雪ばかりです　(春と修羅第一集より)。　夜の湿気と風がさびしくいりまじり　松やなぎの林は黒く　そらには暗い業の花びらがいっぱいで　わたくしは神々の名を録したことからはげしく寒くふるえている　(春と修羅第二集より)。

前者は、「たよりになるもの」や「あてになるもの」を模索し、後者は、信仰上の疑問、つまり真の仏の世界というようなものの追及を主題としているようです。この詩と合わせて、山中校長先生への村上さんへの書簡を書きくわえておきます。『‥‥できるなら好きなマンガでも読んでゆっくり休みたいと思いましたが、そのひまもなくなって参りました。あと二・三年は追いまわされるとかくごしております。何時までもあほう顔をしてもおれなくなって参りました。それに今度は第二詩集をどうしても出さなければなりません。宮沢賢治のまことに「業の花びら」です。今度はも全力をつくします。ただ賢治のような最後はとげないつもりです。４３，３，２９付け、抜粋にて』と。　村上さんの『動物哀歌』は大体において宗教的な作品が多いのですが、とくに「神」や「去って行く仏陀」などで直接主題としてとりあげられているようです。た

だ、特別のよりどころみたいなものをお持ちですか、という問いに、『‥‥別にそういうものを持ってはいません。ただ、絶対的ななにかを得たいと思っているところです。４３，１，１０付け、故里の町にて、より抜粋』と答えておられるので、一概に宗教的といっいよいか疑問です。むしろ村上さんの人生観・世界観として考えるべきものだろうというふうに思います。しかし、大坪さんの『村上昭夫覚書』(雑誌「石櫻」６４号参照)において指摘されたように、「彼の持っている人生観・世界観が彼独自のものばかりではない」ことを、「仏陀やキリストたちの考えを説く彼の中にはほんとうに仏陀やキリストが住んでいたかどうか」ということを、僕も疑問に思います。　また、この『動物哀歌』には詩の背景として、「山」とか「丘」とかなどを用いているものがかなりあります。これは先の書簡の中の『‥‥又ひとつ丘をこえました。しかし今度の丘はとんでもない丘でした。‥‥今度、登る時はヒマラヤ山脈でも越えてみようかなどと、とんでもない夢を見ています。４３，４，１０付け』や、『‥‥もう丘ではなくなって参りました。けれど、どんな山が待っていようと新しい戦いを始めざるを得なくなりました。３４，４，１４付け』などの文章と同様に、村上さんの詩の表現方法、形態のひとつだったようです。　村野四郎さんが『動物哀歌』の序文において、実の世界とか無の世界とかの観点から村上さんの詩を評価しておられますが、僕のような詩をわからない者は、どう評価してよいのかわかりませんけれども、たしかに「破壊力をもつ詩」と「造型的な文学」は、僕に「おそろしいほど新鮮な衝撃」をあたえたようでした。　ぜひ読んでほしいと思う作品は、「雁の声」「ねずみ」「豚」「黒いこおろぎ」「紅色のりんご」「兄弟」「秋田街道」「病」などです。その中で特に「ねずみ」の最後の三行は、今の僕にとってすでに金言となっています。

ねずみを苦しめてごらん　そのために世界の半分は苦しむ　ねずみに血を吐かしてごらん　そのために世界の半分は血を吐く　そのようにして　一切のいきものをいじめてごらん　そのために　世界全体はふたつにさける　ふたつにさける世界のために　私はせめて億年のちの人々に向って話そう　ねずみは苦しむものだと　ねずみは血を吐くものなのだと　一匹のねずみが愛されない限り　世界の半分は　愛されないのだと(全文にて)

村上さんの、まさに「闘病」生活の中から生まれた詩のひとつひとつが、「無限の寂寥と悲哀」をこめて結晶されたのです。　しかし、村上さんは『動物哀歌』が装を新たに思潮社から刊行される日を待たないで永眠され、結局この詩集が第一詩集にして遺著となってしまったのです。　村上さんは先の書簡で、しょっちゅう『‥‥どうかどうか岩高を立派な学校にして下さい。私もがんばります。４３，４，１０付け』『‥‥願わくば岩中の名をけがしたくない思いでいっぱいです。４３，４，１４付け』と、岩中・岩高のことを心配しておられたようでした。今、考えてみれば、石櫻精神とかいうものの、つまり「がんばるということ」は、村上さんのようにがんばることではなかったか、と思います。やはり、社会に出て見ないとほんとうの意味は、なかなかわからないと思うのです。　引用文が多くなりましたが、とにかく村上昭夫さんの詩を読んでみてください。かならずなにか感じるものがあると思います。〈注、一部誤記等を訂正にて＝本人〉

【補足解説】

岩手高校の生徒会執行委員会で出版委員会委員長をしていた私は、三年生最後の退任直前での務めとしての学園文化祭で、先輩・村上昭夫さんの追悼記念展示会を、元・生徒会長であった親友の山田公一君らと主催しました。会場では、お借りしていた村上昭夫さんが吹き込んだ石川啄木の歌、二首の肉声テープを流しました。記事文にある故・大坪孝二氏の「村上昭夫覚書」は、後日の「石櫻」第８０号掲載のために私が氏のご自宅に伺い、直接にご依頼して頂いた貴重な原稿です。文中で紹介の村上昭夫さんの書簡は、当時の山中順三校長先生よりお預かりした内容のごく一部です。私の取材で、記事にあるゆかりの場所などご案内頂いたご親切な父上の故・村上三好氏に、貴重なお話しを頂戴しました。

二冊目の詩集を出す意欲があったこと、もっと長生きしたかったこと、賢治とは違った形で生涯を閉じたかったこと、つまり「絶対的な何かを得たい」と最後まで自己追求を怠らなかったことは、たんなる抒情詩人であるを超えて、稀有の文学求道者であったを示していました。だからこそ私たちは、村上さんの早すぎる他界をどうしても無念に思われて、とても悲しくなります。

ちなみに、「文章家の重夫君」と過分なお褒めを頂いていたのは、私がすでに雑誌『石櫻』に拙い小説「ゆうれい草」や小説「古墳桜狂い咲き」、詩などを発表していたからなのでしょう。村上昭夫さんも戦前の在学中そうであったように、担当国語教師の小畑勝行先生や大森英征先生などの、優れた岩手高校ならではの教育ご指導の賜物でした。私たちの思春期の自己形成を大切に育んで下さった、自由で豊かな学びの学園環境としての「石櫻精神」に、村上昭夫さんと同様に、生涯に心から感謝しております。（了）